

リレーコラム 14

私の生徒たち

田中正之

(京都市動物園 生き物・学び・研究センター長)

私の生徒の話をする。ひとりは、体も態度も大きくて怒りっぽい。一家の父親だが、すぐに家族をにらみつけて威嚇する。そんな父親にはかなわないので、奥さんや子どもたちは触らぬ神に祟りなし、とばかりに遠巻きに見ている。若くはないので勉強は苦手だ。間違いが続くとイライラして、近くの子どもや奥さんに当たろうとする。身の軽い子どもたちは、父親につかまらない距離をはかりながら、それなりに自由に動いている。勉強するのが嫌になっても、奥さんや子どもたちに代わってあげようとはしない。体の大きさに比べて、器の小ささは悲しくなるほどだ。

もうひとりの生徒も一家の父親だ。奥さんと1人の子どもがいる。こちらも体が大きくて偉そうにしている。体力ではかなわない奥さんや子どもたちは、常に父親の機嫌に気を遣っている。やはり勉強は苦手なのだが、奥さんや子どもに当たらないだけまだましかもしれない。少し間違いが続くと、ふいっと席を立てて戻ってこなくなる。機嫌を損ねるとしばらく戻ってこないで、間違えても褒める。間違えても褒めて、正解したらさらに褒める。そうしたら、比較的機嫌よく続けてくれる。体は大きいんだけど、子どもっぽいところがあって憎めない。

3人目は、まだまだわんぱく坊主。とにかく落ち着かない。子どもなので、大人に比べたら覚えはずっと速い。ちゃんと勉強すればどんどん成績は伸びていくのだろうが、ちゃんとしないから、あんまり出来はよくない。たまたま問題に向かっては間違っ、つまらないからと、また席を立てて遊びに行く。彼の友だちは、いい年をしたおじさん2人。体格はぜんぜん違うのに、精神年齢は同じくらい。子どもといっしょになって、追いかけてっこをしたり、プロレス遊びに興じたりしている。大人たちもガハハと大きな口を開けて笑いながら遊んでいる。とても楽しそうなので、こちらも叱る気にはなれない。ようするに、真面目な生徒はいないのが悩ましい。

私の勤めているのは動物園で、これまで書いてきた生徒は、みんな動物たちだ。最初はマンドリル、2人目はゴリラ、3人目はチンパンジーのことを書いたものだ。みんな、京都市動物園で、タッチモニターを使って数字の順番を覚える勉強をしている。紹介した3人たちとは4年から5年の付き合いだ。私は行動の研究者なので、動物たちの行動の意味を考えながら観察している。

私たち人間はサル仲間であり、祖先をたどると共通のご先祖様に行き当たる。その頃からの心の働きを、私たちサル仲間は今でも保持している。人間でもついやってしまうかもしれないことだから、サルたちは人間の姿を映す鏡のようなものだ。しかし、どれだけ観察を続けても、現れない行動もある。家族を含めた自分以外の他者を気遣ったり、自分の欲を抑えて他者に譲ってあげたりする、いわゆる道徳的に正しいとされる行動がそうだ。これらの行動は、人間でも大人から教わって身に付けていかなければならない。そして、大人が子どもに「教える」ということも、サルたちには決して見られない行動だ。このように、私たちの進化の隣人であるサルたちを調べることは、私たち人間を知ることにつながるのだ。動物園にはさまざまな動物がいて、互いに比較することで、共通点や相違点を見出すことができる。これからも、動物たちのことを見ていきたい。

京都国立近代美術館賛助会員

特別会員  **木下グループ** | **FUJIFILM**

一般会員  **ワコー** |  **中央信用金庫** |  **KYOCERA**

当館は上記の賛助会員の皆様からご支援、ご支持をいただいております。

2018年11月19日 発行 視る496号

編集・発行 | 京都国立近代美術館

〒606-8344 京都市左京区岡崎門勝寺町 電話 | (075)761-4111(代表)

編集協力 | 株式会社福本事務所

組版フォーマット設計・表紙デザイン | 大西正一 印刷 | 野崎印刷紙業株式会社

表紙 | 横山大観《或る日の太平洋》1952年

東京国立近代美術館蔵